



Taka Ishii

Gallery

6-5-24 3F Roppongi Minato-ku Tokyo #106-0032, Japan

tel +81 (0)3 6434 7010

fax +81 (0)3 6434 7011

web www.takaishiigallery.com

email tig@takaishiigallery.com

グループ展「日本のシュルレアリスム写真」

会期：2017年1月14日（土） - 2月4日（土）

会場：タカ・イシイギャラリー 東京

タカ・イシイギャラリーは、1月14日（土）から2月4日（土）まで、グループ展「日本のシュルレアリスム写真」を開催いたします。本展では、日本写真史において長らく傍系と見做されていた「前衛写真」の水脈に焦点を当て、その多彩な展開の一端として、中山岩太、岡上淑子、椎原治、山本悍右、安井仲治の作品計28点を展示します。

1930年、『フォトタイムス』の編集主幹であった木村専一らによって西欧写真の新潮流が紹介されると、絵画の模倣としての写真から脱却すべく、スナップショットやクロースアップ、フォトグラムやフォト・モンタージュといった表現技法を取り入れた新興写真が成立し全国に広がりました。そのピークを象徴する写真雑誌『光画』の創刊（1932年）に携わった中山岩太は、「写真の美しさ、写真の持つ味を、根本的に分解」することでモダニズム写真を希求し、幻想的なフォト・モンタージュや耽美的なポートレイトを制作します。「デッチあげても、美しいものに作りあげたい」と語ったその反自然主義的写真観は、自然であることを倫理的価値としてきた日本の芸術写真風土とは一線を画すものでした。1930年代後半、新興写真はその社会性を追求する報道写真と、モダニズム的性格を徹底させた前衛写真へと分化します。1930年より詩作を始めた山本悍右は、前衛写真成立の動きに先駆け、1931年に「シュルレアリスムの写真における実践」を目指し写真制作を開始し、その鋭い社会批評の眼と独自の詩的な感性から生み出される作品は、西欧のシュルレアリストの図像学と日本的なモチーフや関心の見事な調和を示しています。

日本におけるシュルレアリスムは、アンドレ・ブルトンの『超現実主義宣言・溶ける魚』（1924年）を端緒にもたらされるものの、その解釈と受容の過程で、自由獲得や無意識の解放を目指した本来の思想とは異なる独自の特徴をもって浸透しました。写真の領域でも、破綻を露呈した合理主義社会に対し人間性の回復・奪還を目指す、というシュルレアリスム運動の成立由来は薄まり、表現形式や様式を新興写真のテクニックと結び付けて作品化する形で前衛写真が興ったのち各地で新たなグループが結成されます。その隆盛が顕著にみられた関西では、浪華写真倶楽部や丹平写真倶楽部など、アマチュア写真家集団が新興写真の拠点となりました。東京の写真家たちが一早く写真家の社会的機能を自覚し報道写真へと移行したのに対し、関西では引き続き表現上の実験が追求されます。東京の前衛拠点を語る上では欠かすことのできない、滝口修造を始めとした理論的指導者の不在も、制作を楽しむための材料として前衛概念を捉える緩やかな環境をもたらしたと考えられ、結果としてシュルレアリスムの言葉のもとで一括りに語ることのできない多様な活動が展開されました。浪華、丹平双方の中心メンバーとして同時代の写真表現の最前線を切り拓いた安井仲治は、新興写真の技法を積極的に取り入れながらも、写真それ自体の表現媒体としての可能性を模索しました。また、丹平写真倶楽部の写真家6名による共同作品「流氓ユダヤ」（1941年）には、現実社会を直視し記録する厳しい眼差しがうかがえます。同じく丹平写真倶楽部に属していた椎原治は、戦時下の体制に日本社会が組み込まれていく時期にあって、時代の重苦しい空気を反映したとも言えるシュルレアリスムの表現の噴出とはやや異なる立場を取り、自身のアカデミックなルーツに由来する優れた画面構成力を誇る作品を制作しています。

1950年代に彗星のように芸術界に現れた岡上淑子のフォト・コラージュは、物資の不足に由来する欠乏感と解放・自由の気運という両側面によって象られる日本の復興期を背景に、作家、ひいては女性の心の襲を象徴的に表現しています。1953年の初個展に際し、滝口修造が親しみを込めて「岡上さんは画家ではありません。若いお嬢さんです。」と寄せているように、明確な作家意識を持たなかった岡上は、当時の芸術動向や芸術界に与することなく、心赴くままに創作し紡ぎだしたイメージは、純粋な意味でのオートマティスムに溢れていると言えます。

協力：MEM、The Third Gallery Aya

中山岩太 1895年福岡県生まれ（1949年没）。東京美術学校臨時写真科卒業。農商務省海外実業練習生として1918年に渡米、肖像写真館を開設。1926年に渡仏、藤田嗣治や海老原喜之助らとの交流を通じ純芸術写真の制作を志向。1927年に帰国、兵庫県芦屋市に居を構える。ハナヤ勘兵衛、紅谷吉之助らと芦屋カメラクラブを結成。1932年には野島康三、木村伊兵衛と写真雑誌『光画』を創刊。主な個展に「写真のモダニズム 中山岩太」兵庫県立近代美術館他巡回（1985年）など。

岡上淑子 1928年高知県生まれ。文化学院デザイン科でのちぎり絵の課題をきっかけにコラージュに親しみ、進駐軍が残した『VOGUE』や『LIFE』などのファッション誌・グラフ誌を用いたコラージュ作品を制作。滝口修造に見出され、1953年と56年にタケミヤ画廊で個展を開催。結婚とその後の高知への移住を機に制作・発表活動の舞台から退く。主な個展に「岡上淑子 フォト・コラージュー夢のしずくー」第一生命ビル（2000年）など。

椎原治 1905年大阪生まれ（1974年没）。1932年、東京美術学校西洋画科を卒業。兵庫県武庫郡（現西宮市）にアトリエを構える。この頃写真制作を始め、丹平写真倶楽部に参加。中心メンバーとして活躍し、写真とドローイングを併用した独自の技法「フォト・パンチュール」も試みた。1953年には棚橋紫水、河野徹らと共にシュピーゲル写真協会を設立。主なグループ展に「モダニズムの光跡 恩地孝四郎・椎原治・瑛九」東京国立近代美術館フィルムセンター（1997年）など。

山本悍右 1914年愛知県生まれ（1987年没）。明治大学仏文科を中退、1930年から詩作を始める。翌年、「シュルレアリスムの写真における実践」を目指し写真制作を始め、写真集団「独立寫眞研究會」結成に携わる。「ナゴヤ・フォトアバンギャルド」、「VIVI」や前衛詩人グループ「VOU」に参加し活発な活動をする傍ら、1938年よりシュルレアリスム詩誌『夜の噴水』を発行。主な個展に「シュルレアリスト山本悍右」東京ステーションギャラリー（2001年）など。

安井仲治 1903年大阪生まれ（1942年没）。家業の洋紙店の経営に携わりながら、浪華写真倶楽部に1922年に入会。1930年、大阪で上田備山らと共に丹平写真倶楽部を結成。新興写真の技法を積極的に取り入れ、写真それ自体の表現媒体としての可能性を模索する一方、戦後のリアリズム写真の先駆けとも言えるべき優れた作品群を残す。主な個展に「安井仲治展」兵庫県立近代美術館他巡回（1987年）など。

是非、貴誌・貴社にて御紹介下さいますよう宜しくお願いいたします。

尚、掲載用写真の貸出など、御質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。

タカ・イシイギャラリー東京 展覧会担当：上松エリサ プレス担当：増山貴之、岡村万里絵

〒106-0032 東京都港区六本木6-5-24 complex665 3F

tel: +81 (0) 3 6434 7010 fax: +81 (0) 3 6434 7011

e-mail: tig@takaishiigallery.com website: www.takaishiigallery.com

営業時間：11:00-19:00 定休日：日・月・祝祭日



Kansuke Yamamoto

"Buddhist Temple's Bird Cage", 1940

Gelatin silver print

Image and paper size: 25.6 x 17.7 cm

© Toshio Yamamoto, the Estate of Kansuke Yamamoto



Nakaji Yasui

"(Gaze)", 1931/2010

Gelatin silver print

Image size: 33.1 x 24.8 cm

Paper size: 43 x 35.4 cm